

「作家が語る 入江観の世界 ...何故絵を描くのですか」講演会記録

杉並区図書館ネットワーク主催 2007(平成19)年度企画事業

2007年10月6日(土)10:00 - 11:30

杉並区立中央図書館 地階視聴覚ホール

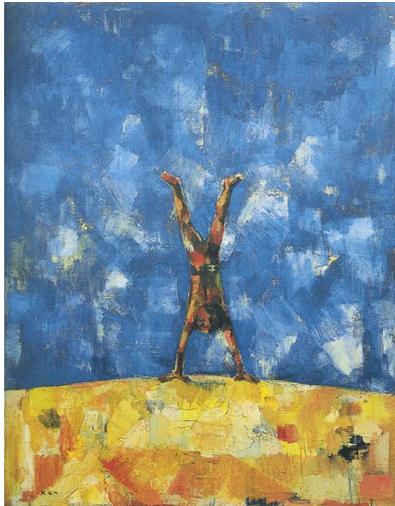
子供の頃から絵を描くのが好きでした。好きだったのですがいつも教室の後ろに飾って貰えるほどうまくありませんでした。でも小学校の担任だった先生が「ダメだ」とは言わなかった、「入江お前は不器用な奴だなあ。但し、不器用なことも芸の内だよ。」とは言われましたが、「ダメ」だと言われなかった。誉め言葉にのるということも大切であるし、誉めて行くことも大切です。それが大きな救いであり、出発点だった。絵を描くことが好きであるから、72歳になる今日まで絵を描いてきました。才能というのは旨いか下手かということと別の問題です。好きかどうかの問題であって、一生好きであり続けることが才能であると思います。現在残っている世界で最も古い絵はラスコー等の洞窟の壁画です。でもそれが一番古い絵ではありません。きっとそれよりずっと昔の人も絵を描いていたと思います。海辺の砂に何かの絵を書いた人がいたかも知れません。でも多分何も理由はなかったと思います。ただ「描きたい」と思って描いたのではないのでしょうか。自分もただ絵を描くのが好きでここまで描いてきました。

学童期に当たる当時は戦争中でした。新制中学の一期生ですから物資が豊かな時代じゃありません。戦時統制下ですから今のようにあらゆる画材が簡単に手に入る世の中ではありませんでした。栃木県の日光に在る自分の小学校では、近所にある羊羹屋さんが包み紙を学校に寄付してくれて、その包み紙の裏に絵を描いていました。油絵の道具を手に入れたのは中学の時でした。自分は戦後の新制中学の第1期生でした。当時油絵を描いていた知人から「もう自分は使わないのでお前にやる」と言われて、使い古しの中古でしたが、油絵の道具を頂いて嬉しさ一杯で油絵を描きました。

高等学校を出て大学への進学の際には、東京藝術大学に入り絵描きになることを親父に反対されました。妥協の産物でしたが「藝術学科なら教師の道もあり、何とか食っていける」と親父を説得して、東京藝術大学の美術学部藝術学科に入学しました。入学してからはラグビーをやりました。藝大のラグビー部はレギュラーが集まらないようなところでしたから入部すればすぐレギュラーで、試合の時は早稲田大学からの助人選手をメンバーに加えて試合をしました。自分はスクラムハーフでしたので、早稲田からの助人選手にあれこれと指示を出していました。その助人の中に、早稲田の木本建治さんがいたのですが、後日テレビで拝見し、「ああこんな立派な選手にあれこれ指示を出していたのか」とびっく

りました。この人はその後ラグビー部の監督になられた後、惜しまれることに数年前に逝去されました。このように、大学にいた頃はラグビーもしていたのですが、絵を描きつつ、藝術学科ですから美術史や美術理論といった学問の世界にいました。

大学卒業後は中学（東京都北区）の先生になりました。



青空 1958年

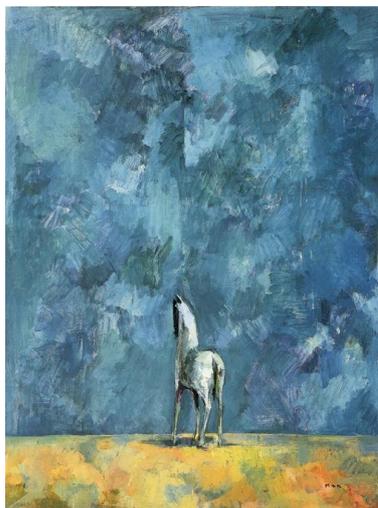
中学の先生になって2年目のときに描いた絵です。私の絵には蒼い空がよく画かれることから「蒼天の画家」というタイトルも茅ヶ崎美術館で個展を開催して頂いた際につけてくれたものです。話しは戻りますが、当時、思想的にどうこうというのはなかったのですが、「何かをしなければならない」という気持ちから日教組の運動に参加していました。集会活動に参加していましたが、徹夜の座り込みなどの最中に、この時間を使って家で絵を描いていられたらどんなに良いか、というように違和感を覚える日々でした。

その頃描いた絵で、組織の歯車にはならないぞという気持ちが、子どもが逆立ちした絵になった。春陽会3年目の時に出した絵です。後日裏話を聞いたのですが、これが岡鹿之助先生に誉められて本当は賞の候補になっていたそうですが、大学時代の恩師（加山四郎先生）が私の年齢を気にされまして、待ったをかけた。まだ20歳過ぎの者には早すぎるということが理由で賞が頂けなかったそうです。賞なんて気にしてなくも、貰えたはずのものが貰えなかったとわかると、随分と悔しいものでした。



走れ 1959年

これも賞をもらえなかった絵です。その翌年に描いた丘を駆ける少女は素通りしました。



白い馬 1960年

その翌年に、馬の絵を描いたら受賞しました。

昭和34・5年に東北旅行に行きました。その頃教師をしていた友人に夏休みに八戸市に来ないかと誘われ、当時はまだ東北旅行とは言っても今のように交通の発達した時代じゃありませんから簡単な旅行ではありませんでした。鉄道の駅に家族を送りに行くことも日常的な光景でした。僕も彼女（今の妻ですが）に、上野発の何時何分と連絡をしたのですが見送りに来なかったんです。窓から顔だしていくらホームを振り返ってもいない。なんとなく傷心旅行になりました。この旅行で青森県八戸市の種差牧場に行きました。みなさんも御存知の東山魁夷の有名な道の絵「ひとすじの道」が描かれた牧場です。その種差牧場に白い馬がいたので描いた絵です。傷心旅行の思いが絵に現れているのかもしれませんが、「青空」で賞が貰えなかった後「賞なんてどうでもいい」と思っていたのですが、不思議なものでこの絵で春陽会賞を頂きました。賞を貰ったら、彼女が絵を見に来てくれたのが切掛けで仲が元に戻りました。



樹列 1960年

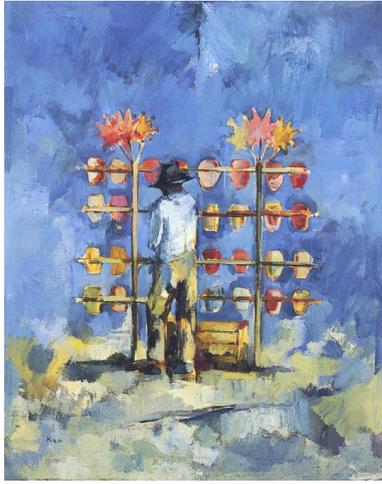
この絵は、日教組の活動で北区の飛鳥山公園で神近市子の演説を聞きながら座り込みをしていた時、「なんか違うなぁ」と思いながら眺め、頭の中でデッサンしていた樹です。朝日新聞主催の現代フランスクリティック賞絵画展に出展した絵です。フランスの若い作家と交流が持て非常に良い経験となりました。

その後も加山四郎先生に見て頂いていましたが、日本中、抽象画でなければ絵ではないという時代にあったのですが、抽象画には不器用でなかなか始めません。そんな時に、加山四郎先生に見て頂くと「今どきセザンヌでもあるまい」と言われ、友人たちにこぼしたことがありました。当時は抽象絵画が主流を占めていました。でも自分はずっとこのような絵を描いていました。

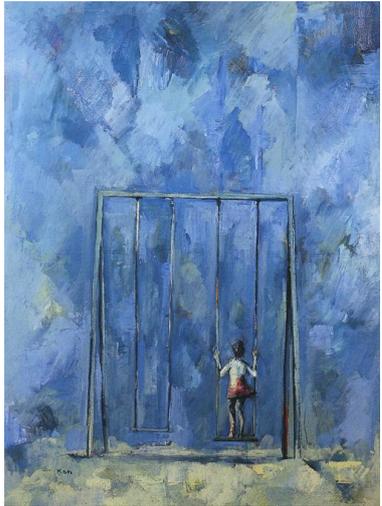


家を造る 1961年

当時目白に引越しました。そのとき建てていたとなりの家です。青空と白木の柱の木組と、そのコントラストの面白さに魅かれました。その頃、「いつの日かフランスに行きたい」と思っていました。でもお金なんてありません。お金があっても外貨制限の時代であり、渡航は容易なことではありませんから、行くための手段は、フランス政府の給費留学生しかありませんでした。しかし、先輩達も大勢待ち望んでおられるので、美術部門では年に1人か2人しか選ばれず、全体でも30人ほどの狭き門でした。



風車売り 1962年



ぶらんこ 1962年

給費留学生を目指して、昼間は学校の先生、夕方5時になったら日仏学院に通う生徒に戻って夜の8時まで、日仏学院でフランス語の勉強を5年ほどしました。5年経って給費留学生試験に受かった1962年の前後に描いた絵です。

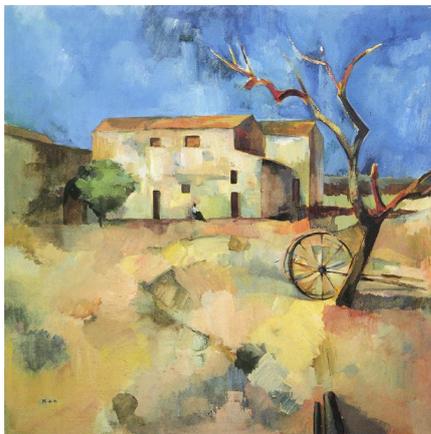


青いぶどうの静物 1963年

昭和37年に中学校を退職して、フランス政府の給費留学生として渡仏しました。当時航空機でフランスまで行くと24万円。船だと18万円。6万円あれば2ヶ月くらい暮らせると考えて船で渡仏しました。でも部屋付のボーイに1万5千円、ジブチ、スエズと、寄航する先々でお金を使ってしまい、6万円なんてあっという間になくなりました。でも随分いろいろな経験をした1ヶ月の船旅でした。フランスでは国立高等美術学校でモーリス・ブリアンション先生(1899年生)に絵を習いました。当時64歳の先生ですが、立派な先生でした。その頃の私の絵です。



クリュニイの庭 1963年



南仏の農家 1963年

フランス留学中南フランスを旅行したときの絵です。サロン・ドートンヌに出品し入選しました。この絵をアメリカのデトロイトの画商が見てアメリカで展覧会をやらないかと

誘われました。フランス人の仲間に相談したところ、最初に金を貰わないならやめた方がいいと言われ、取りやめましたが、フランスが中心となって世界の美術界にその様な大きな影響を持つことを実感いたしました。



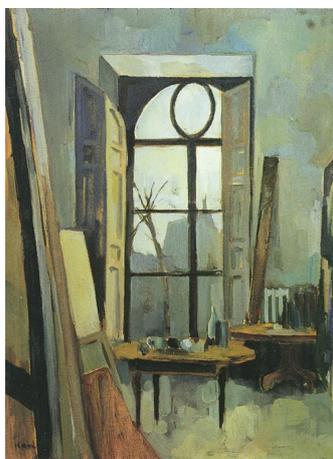
アイロンのある生物 1963年

社会人の経験もあり生真面目に通学する方でもなく、寝坊して行くこともしばしばありました。在る時、教室に遅刻をしました。ブリアンション先生は朝の9時頃から教室に入り、一人一人の学生に教えてゆくという対応の取れる人でした。廊下でブリアンション先生とすれ違いまして、先生に呼び止められました。てっきり叱られると思っていたと、君の描き掛けの絵を見てきたよと話され、背景の色とのコレスポンドンスについて工夫が必要だよ、と指導されました。帰って行く先生の姿を見送りながら、「ああ、遅れて登校した自分のような生徒でもちゃんと見てくださっているのだなあ。」と思い感動しました。今でもこの絵を見ると当時のその出来事を思い出します。後に女子美で教師という立場になり、はたして自分は学生をそのように指導できているだろうか、と考えることがたびたびありました。



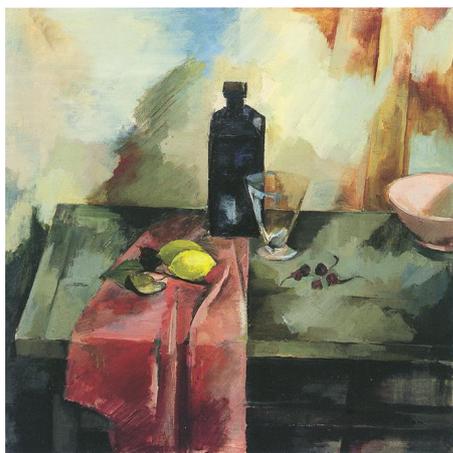
美術学校の庭 1963年

アトリエボザール（美術の工房）から見た光景です。



プリンアシヨンのアトリエ 1963年

月曜の朝です。世界中からいろいろな人種の生徒が集まって、賑やかに暮らしている場所です。アトリエ内の場所の取り合いをするものですから本当はもっと騒々しいのですが、プリンアシヨンのアトリエです。



レモンの静物 1963年

これは自分のアトリエで描いたものです。



トレドへの道 1963年

スペインを旅行したときの絵です。



秋日 1965年

昭和39年に帰国して、女子美術の非常勤講師になりました。当時の女子美の給料は9,800円でした。ちょっとそれでは食べていけませんので非常勤で三鷹高校にも通っていました。三鷹高校への行き還りの途中に馬場があったので、そこで描いた絵です。

フランスから帰国して2、3年日本の景色に馴染めませんでした。フランスから帰国した人は、安井曾太郎、梅原龍三郎、小杉方庵、みなそのような思いをするのですが私もそうでした。フランスに行くのはよいが、帰ってくると皆苦しい思いをしてきています。小杉方庵はこのギトギトした油絵とは付き合えないとして、墨絵の世界に入ったりします。

正直帰ってきた日本の世界では、青や赤のトタン屋根の景色は美しいとは思えないですし、フランスの景色ばかりが立ち上がってくる苦しくて厳しい時代でした。展覧会が近づくとアパートを別に借りて、絵を描くという生活をしていました。



自転車 1968年

昭和40年4月に女子美が茅ヶ崎に校舎（大学の他に幼稚園も併設）を作りました。でも当時誰も行きたがらないので、女子美から採用の話がありました。女子美には珍しく学校で建てた家まで、校舎の中に1軒用意してある、住むところと仕事をするところさえあれば良いと思いすぐ茅ヶ崎に行きました。

転居したその日に、小さな丘の中腹にある家ですからアオバズクが鳴いていました。女房は何年たったら東京に帰ると聞きます。そのような日常の中でもフランス帰りの後遺症で苦しんでいました。それでしばらく描くの止めました。習慣で描くのではなく「どうしても描かずにいられない」ということが絵にとって重要であることに気付きました。そこで、描くの止めたのです。

そんな悩みを抱えていたとき小田急線の近くの多摩川の土手を少年が自転車で走るのをみました。その時「これだ！」と思い、見えなかった自分を取り戻した絵です。

フランスへ行くにあたりセザンヌが好きでセザンヌを追いかけていました。セザンヌと自分を重ね合わせて自分のはみ出る部分を探していたのです。それが自分であるはずだと考えていました。けれども無かった、自分はすっぽりセザンヌの中に納まっていた。

毎日、美術学校へ出掛けていました。そして、セザンヌの絵を見たいと思い、今のようオルセー美術館ではなく、決まってジユド・ポム（通称、印象派美術館）のセザンヌの絵の前にずっといました。

ところが、自分の方はセザンヌにすっぽり嵌まってしまってなかなか抜出せないのです。その当時は抒情を否定する時代であったので、抒情という自慢にならない部分しか見出せなかったのです。しかし、そのような自分を認めるしかないと思って描き続けていました。



砂丘の自転車 1969年

茅ヶ崎に住み始めた頃に描いた絵です。僕はこのような構図の絵が多いのですが、栃木県日光市の生まれで子供の頃、海を見たことがなく、地平線や水平線を見たことがありませんでした。そのような経験が影響してこのような構図の絵が多いのかもしれませんが。青い空と自転車、砂丘、展覧会で「何台の自転車がありましたね。」なんて言って下さる方がいます。自分は自転車を描くことが多いですし、自転車が好きなんです。自転車はこぎ続けないと倒れてしまうそんな危うさに魅かれます。



家族 1971年

長男は東京で生まれました。娘は茅ヶ崎で生まれています。娘が欲しくて、18歳になったら銀座に出かけて手を繋いで歩いてやろうと思っていました。ところが、その年齢になったら側に来ないで言われるし、却って嫁に行く頃になってベタベタされてこちらが気恥ずかしくてなっていました。そんなエピソードもあったりするのですが、その当時、妻はいつになったら東京に帰れるんだと言うのですが、僕はすっかり茅ヶ崎の生活が気に入

っていました。



凧 1971年

女子美のグラウンドで子供が凧揚げをしている絵です。我が家では女子美全体が我が家の庭でした。当時茅ヶ崎は自然も多く残っており、見ず知らずの人が我が家の庭先に長芋を掘りに来るようなところでした。



突堤の釣り人 1971年

突堤で釣りをする人々の絵は、NHKの番組で制作風景を撮影したときの絵です。当時は予告編だけカラーでした。日本画は平山郁夫、彫刻は雨宮敬子、版画は吹田文明と巨匠に交じって、自分は洋画代表として撮影に参加しました。

丘の中腹の女子美の中に9年住んでいましたが、茅ヶ崎が気に入ったので、海の方に家を作りました。



渚への道 1974年



遠い渚 1975年

女子美はやがて茅ヶ崎校地を売却して相模原に土地を購入し、平成2年4月に相模原校舎も開設することになりましたが、その当時はそのようなことを考える由縁ありません。自分の家を海辺の近くに購入した頃の絵です。家から5分歩いて真直ぐに出たところの海岸の絵です。当時はまだ砂浜が現在の3倍くらいの幅がありました。今は景色が変わってしまっています。



電柱の人 1977年

海辺の家から自転車で丘の上の女子美に通ってました。その道すがら見た光景を絵に描きました。何年かして、この絵を栃木県立美術館で見た東京電力の役員の方から電話がありました。いろんな人の描いた電信柱の工事の絵を集めているということでした。貴方にも工事の絵を描いてほしいということだったのですが、この絵の工事方法はちょっと古いのでゴンドラを描いて欲しいと頼まれました。

その当時は、腰綱だけで電柱に登る危うさや緊張感を描きたかったのですが、熱心をお願いされ、断りきれずに依頼を引き受けることにしました。また、予算の都合で10号の絵をお願いしますとのことだったのですが、100号ぐらいの絵でないと「空間の広がり」が表現できない」と言いましたところ、最終的に20号で引き受けました。でも実際にゴンドラの工事を見せてもらったところ空に鮮やかな黄色いゴンドラによる工事もなかなか緊張感のあるものでした。



ダイヴィング 1977年

これも危ういもの、緊張感を感じるものです。当時このような絵を描いていました。



早春の海 1979年

朝日新聞の日曜版の「紙上創作展 おんな」に掲載されました。風景の中に、女性の後姿を描いていたのは自分の絵だけでした。



川のほとり 1980年

茅ヶ崎の川のほとりにある何処でもありそうな風景の絵です。よく人から、自分の絵について、平凡な何でもないような人の生活の匂いが何処からかしてくる所が好きであると言われますし、自分でもそのような場所が好きです。この頃から何でも無いような景色を描くようになりました。普段歩いているような所で「ちょっと、ちょっと」と呼び止められるような所、景色に「ちょっと、ちょっと」と呼び止められる。この「ちょっと、ちょっと」があれば絵は半分完成です。



夏の終わり 1982年

この頃まで茅ヶ崎には季節感があり、夏も終わりになる9月の頃には海岸から人がいなくなり砂浜も静まり、海は寂しくなりました。けれども、今は1年中サーファー等で海岸は賑わっています。



青嵐 1983年

高速道路と山の景色ですが、これも日光の高速道路を走っていて、「ちょっと、ちょっと」と呼び止められた景色です。当時は交通量もまだ少なく車を止めてスケッチしました。高速道路と杉木立のコントラストが珍しかったのかもしれませんが。



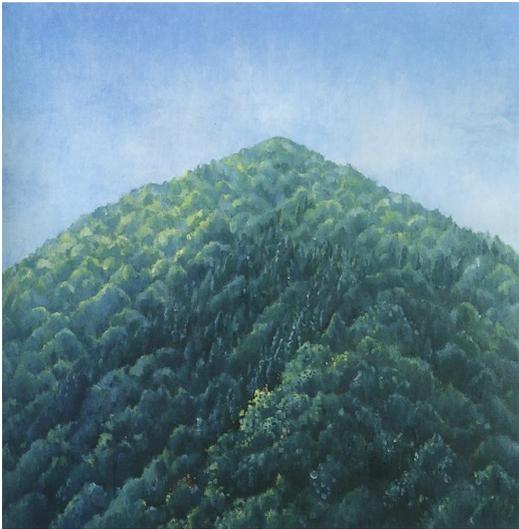
港の休日 1986年

横浜の山下公園です。この頃には山下公園によく出掛けて絵を描いていました。この絵には赤ん坊、子供、若者のカップル、中年の人、おじいさん、おばあさんといろんな年齢の人間を描いて、人の一生をこの中に描き込んでみようと考えていました。これは100号の絵ですが、ほかに80号の絵があります。



湖畔の朝 1986年

日光の中禅寺湖です。



青山 1987年

日光の名も無い山です。



双稜 1988年

平塚と大磯の間にある高麗山です。愛想の無い絵を描いていました。



三輪山 1989年

40代の十年くらいの中に、当時、奈良の車木（くるまき）工房という版画工房で中川一政先生といっしょに仕事をしていました。奈良周辺を先生と一緒に歩いた時に会った、三輪山という古代信仰の山がモチーフです。その麓には大神神社（おおみわじんじゃ）があります。神社に本殿ではなく、御神体は三輪山そのものです。



光る海 1989年

茅ヶ崎の海です。



砂丘と海（LEBRON） 1990年

1987年に日伯美術連盟の浮田克躬さんが美術連盟の役員をやれと熱心に勧めて見えました。あまり役員等はやりたくないのですが、熱心に勧められて引き受けることになりました。浮田さんがブラジルに自分が描くべき風景があると推奨されてブラジルへ渡航した際に、言われたリオデジャネイロの海岸へ行ってみましたら、具体的な場所は聞かなかったのですがすぐにここだと分かりました。「新たな画境が開けるだろう。」という殺し文句に負けて入った日伯美術連盟でした。そんなことを、戻ったら浮田さんに話そうと思った矢先に、帰りのニューヨークで浮田さんの訃報を聞き驚きました。



山湖夕映 1991年

箱根です。



湖上麗水 1991年

この絵も中川一政先生と奈良に通っていた頃の絵です。琵琶湖の絵です。この頃になって漸く日本の景色の美しさを見つけるようになりました。妻といっしょに出かけてスケッチをしたのですが、自分はこのような寂しいところの景色に惹かれるのです。しかし、車の運転をしてくれる妻は、絵を描いているときには、傍らですっと待っていてくれるので、寂しいところで待つのは怖いと言います。



湖上凱風 1992年

これも琵琶湖の絵です。



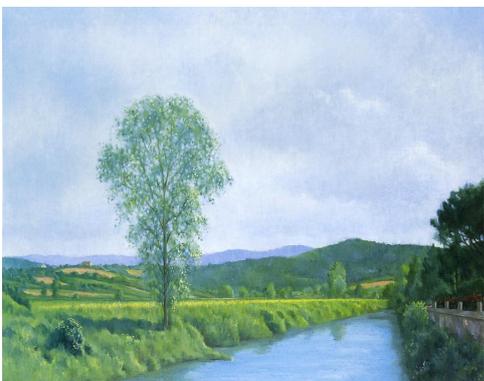
遊水 1993年

渡良瀬遊水池です。この年、高校時代に憧れていた英語の先生が山で遭難して亡くなりました。先生は俳句をやっており、その句集のタイトルに『遊水』という言葉があって、鎮魂の意味を込めて、先生の葬式の帰りに初めて描きました。



サンジオルジュの道 1994年

1993年に3ヶ月間、女子美の海外研修旅行でヨーロッパに行きました。フランスのシャルトル近くにイリエという村があります。マルセル・ブルーストが住んでいた町です。途中にサンジオルジュという町がありまして、そこで「ちょっと、ちょっと」と景色に呼び止められ描いた絵です。ヨーロッパにはサンジオルジュという町はフランスやイタリアに限らず沢山あり、教え子の学生から「今ヴェニス（イタリア）のサンジオルジュにいます」と真夜中に電話がかかってきたことがあり、サンジオルジュとはここか、と思いましたが、残念ながら他のところでした。



トスカーナの樹 1995年

このときは、絵筆を持たずに出掛けましたが、結局描くことになりました。日本に帰ってきて、以前フランス留学をした時は帰国後随分悩みましたが、30年の絵描きの生活は無駄ではなかったことが判りました。フランスの景色、イタリアの景色を描いても、向うの景色というものではなく、日本の景色を描いても同様ですが、私の世界が見えてきました。より「自分の景色」というものができてきた、自分の世界が描けるようになっていました。



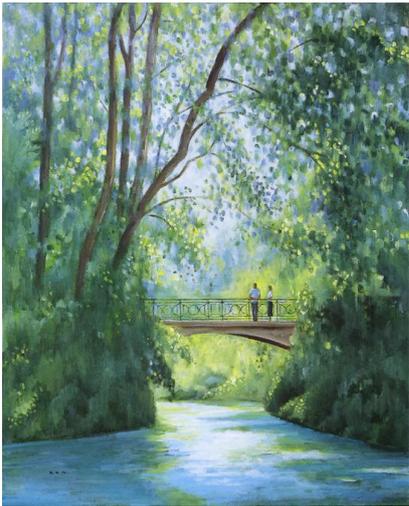
海辺の丘 1995年

これは海辺の丘です。茅ヶ崎校舎が閉校になるので途中まで描いて投げ出していた絵です。1995年に京橋の「兼素洞」で個展をやるにあたって作品に数が足りない。ちょうど良い絵があったと思い出し完成させた80号の絵です。この絵は宮本三郎賞を頂戴した絵ですが、その個展を誰かが見ていたんだと思います。宮本三郎賞の受賞の知らせを聞いたのは大学にいた時でした。絵に限ったことではないのですが、「どこかで必ず誰かが見ている。」と、そんなことを感じさせ、自分に言い聞かせた絵です。



山湖麗水 1995年

奥日光の風景です。奥日光と言えば栃木県の風景を思い出しますが、この絵は群馬県側からの風景です。



翠苑小橋 1995年



森の日曜日 1996年

1995年にフランスにいた時の絵です。パリの16区のアパートを借りて住んでいました。ブローニュの森です。フランスの金持ちは南フランスのほうに長期休暇をとってバカンスに行くのですが、お金のない人々はブローニュの森に遊びに行くのです。そこで人々は裸になって寝転がって日焼けをしています。そんな森です。

自分の絵には、親子連れや若い人達が小さく描かれています。小さく描く理由は、人間はちっちゃなものだ、小さいけど間違いなく生きている、そんな考え方から人間を捉えているつもりです。



汀の人 1996年



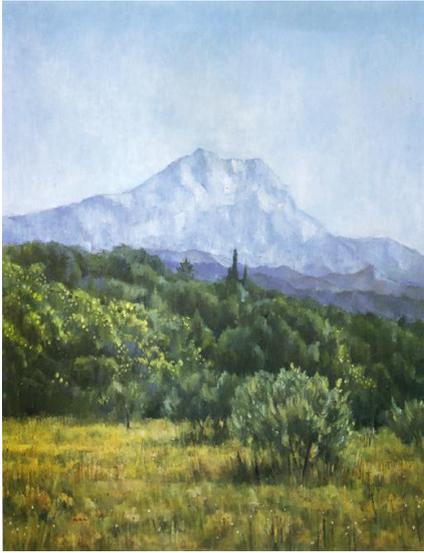
北の山湖 1998年

北海道の然別湖です。帯広から少し奥に入ったところです。



ヴェズレーの山 2000年

ブルゴーニュのヴェズレーの山です。



プロヴァンスの山 2000年

みなさんも御存知、有名なサント・ヴィクトワール山です。ずっとセザンヌを追いかけてきて、セザンヌの描いた山を自分ごときがと思っていたのですが、どうしても描きたくなくて「セザンヌさんごめんなさい」という気持ちで描きました。サント・ヴィクトワール山というと恐れ多いので題名は恐れ多いので「プロヴァンスの山」としました。当時女子美術大学の短期大学部長をしていて、短期大学部長室にイーゼルを置いて、お守りのように絵を描き続けていましたが、そんな気持ちで描いた絵です。



えにしだの丘 2002年

堰を切ったように描きました。



森の夏の日 2002年

フランスのブローニュの森の夏には、木立に差す光の色が違って見える、そんなときの風景です。



湖畔緑蔭 2002年

日光の中禅寺湖です。



避暑地の池 2003年

毎年、女子美アートセミナーで軽井沢に行き絵を教えているのですが、軽井沢の夏の景色です。



午後の海 2002年

日本テレビの「美の世界」で取材を受けて撮影された絵です。



蒼杉水映 2002年

箱根です。

=====
以下は、投影された写真を見ながら、入江観先生が説明された概要です。

これは藝大ラグビー部の写真、船にのってフランスへ向かっているところ、パリのアトリエの写真、セザンヌの絵がかかったジュードポームの美術館、ビルダブレイ、ジュベールの日曜日という映画の舞台となったところです、これは中川一政先生とフィレンツェでの写真です。このあいだ亡くなられた高山辰雄先生と中国へ行った時の写真です。サント・ヴィクトワールを描いているところです。中国の文化大臣と堤清二さんです。

こんなところですが、私は本当に絵を今日まで描いてこられたのは幸せだと思っています。顔で笑って心で泣いてというセリフがありますが、よく「絵を描く苦しみ」と「絵を描き続ける苦勞」とどっちにエネルギーを使いましたかと問われれば、はるかに絵を続けるために使ったエネルギーのほうが大きかったらと思う。それでもなおかつ絵をやってきたということは良かったと思います。何が良かったかというと70歳にもなってまだやるのが山ほどあってこの次何をやろうかという思いで毎日を過ごせることはとても素晴らしいことだと思っています。そういう環境に自分がいられるということに感謝しています。

入江観の世界ということで、今日ここでお話をさせていただきましたが、これで終わりということではなく来年も個展を予定しておりますし、どういうふうに展開するのか、たいした変化はないのかもしれないが、今置かれている状態よりは一歩でも半歩でも進めれば良いかなと思って状態であります。長い時間ご退屈だったかも知れませんが、御静聴いただきありがとうございました。

【質問コーナー】

何か質問があればどうぞ、遠慮無く。

Q: お話を伺い感動致しました。入江先生には70歳になっても、山ほどやりたいことがあると仰っていました。それについて少しお話していただきたいのですが如何でしょうか。

A: そういわれると実は困るんです。話ではなくやって見せないといしょうがない、山ほどあることを、絵の話は口で言うのはすごく難しい。何で絵を描くのと言われれば、僕は僕のことを知っていると思っている、俺はこういう男だ、と思っている。それはあてにならないとも思っている。僕の知らない僕というのがいるはずなんです、それに会いたいわけですよ。山ほどというのは僕の知らない僕に会いたいという気持ちが山ほどあって、今度描く絵に、今まで知らなかった自分というのが出てくれば、とてもすばらしいことなんです。その次描く絵は、また今まで知らなかった自分に会えればいいと思っている。それ

がずっと続いていくだろうと思っている。だけど実際はそうはいかない。なんだこんな絵前に描いたじゃないかという、そこで苦しい思いが始まる。けども気持ちとしてはそうじゃない、まだどっかにあったことのない自分があるはずだ、という思いが続く限りは山ほどということになる。よく政治家の人は質問にまっすぐ答えなくて、なんだかわざとなんだか、わからなくてなんだか見当違いの答えをしているのを、ありゃおかしいなんて人のことを良く思いますけど、僕もあなたの質問に正面から答えたことになるのかわかりません。けれども、とにかくやりたいことがあるというのは、別の言い方をすれば、今の自分ではだめだということです。まあしかし、ああ俺は素晴らしい仕事をしたこれで満足だといったら先はない。いっぺんそういう気持ちになってみたいとは思いますが。長い間絵を描いてきて、自分はひどい絵描きだ、世の中で俺よりひどい絵描きはいないと思うことはしばしばあります。だけど、たまに、一瞬、俺ぐらいすごいやつはいないと思う一瞬があるんです。それにいっぺん会うとやめられなくなる。だいたいひどい絵描きだと思ってるんだけど、そうだとあの時、俺ぐらいすごい絵描きはいないのではないかと思ったことがあるな、やってればまたあれがまた来るかもしれない、と。パチンコと同じといったらおかしいかもしれないが、だいたい、全体的に見ればお客がソソるからパチンコ屋さんというのは残っているんですけどね、一瞬バァーっと出ることがある。僕も20年以上前にパチンコに凝ったことがある。あのキタキタキターというあの気持ち、やったことがある方はわかると思います。あのキタキタキターというのがあるから、あれが忘れられなくてまたやるわけで、絵描きでも一瞬そういう時がある。錯覚だったのかもしれませんが……。それはだけどダメだと思ったら止めているでしょう。安部さんのときに鈍感力というのが言われたけど、ある意味鈍感といわれるかもしれないけど、自分にはなにか来るかもしれないと思っているから続けてこられたのかも知れない。

他に何か？

Q：入江先生の絵は風景が圧倒的に多いのですが、先生はカメラを持って歩いておられて、風景を写真に焼き付けるのですか。自転車に乗っているときとか、イメージをどのように焼き付けておられるのでしょうか。

A：自転車に乗ってる時だから、目に焼き付けてその後探すんですよ。材料になるもの、どっかでやってないかなあと思ってカメラを持って回ったり、それから翌日…。写真は確かにとった。カメラのこと、絵描きによっては写真を使うのは邪道だと良く思いますけど、僕は結構使います。使うけど、はじめて写真から描くというのはなくて、「ちょっと、ちょっと。」と呼び掛けがあったら写真を撮る。「ちょっと、ちょっと。」が大事で、それが最初に無いとだめだと思っている。よい絵ができればどんな材料だって使えば良い。僕は良い絵の底の底には「ちょっと、ちょっと。」というのがあるかどうかだと思っています。

今日は入江の絵を見て頂きながら話をしましたが、よく話しをするのは「人は何故絵を

描くのか」という話をします。21世紀になって美術というものがあらゆるジャンルにあって、ものを写生するなんてものだけが美術じゃないというのは承知ですが、でも土に穴ほって美術だと言ったり、いろんなパフォーマンスまで美術となり、美術というものが何でもアリになってしまっているわけです。でも人類で一番最初に絵を描いた人のことを考えてみようと言うのですが、それはアルタミラとかラスコーとか3万年前のものが残っているけど、その前に描いた人がいるかもしれない。残ってないだけ。だけど何故絵を描いたのか、絵の具や美術学校や美術館、美術雑誌なんてありません、「美術」という言葉もない、けどなんだか知らない、描かずにいられないという気持ちが出て手が動いた。そのときに身近にあった材料を選んだ。そういう絵の原初的な形、基本的なことを忘れていないか、美術という常識が蔓延していて、その常識の中で絵を描くということになっている。本当はどういう絵を描いたってかわらないし、絵の具や美術館とか美術環境が恵まれている、恵まれているものを活用しても構わないが、一番芯の底には「描かずにはいられない」という気持ちがあってやっているのかどうか、僕は人の絵を見るときでも「感動」というものから発して描いているかどうかということを見たいと思っている。ということです。

ほかに質問ありますか。

質問が無いと感動に平伏したのかと思うし、それとも、こりゃ全然話にならなかったのとも思うし。今日は一つ二つ質問があって。あー聞いてくれたんだという実感があってほっとしています。

Q：講演の中で日中文化交流に参加されたことにも触れ、何よりも入江先生自身が何度も中国に出掛けておられます。中国訪問を何回も繰り返される中で、中国の絵を描こうという気持ちになったことがおありですか。中国で創作意欲を掻き立てられた折のお話を伺いたいと思います。

A：僕は中国に8回行っている。来週水曜日からまた敦煌へ行くんです。スケッチはしたことがあるんですが、中国の風景というのは油絵にしたのはまだ一枚もありません。「ちょっとちょっと」にならない、というより中国は見るものがすごい、それでいっぱい、いっぱいになって帰ってくる。西安の周辺などいつまでいても飽きない。高山辰夫先生といったときは、案内されて博物館を見に行ったけど、高山先生はどんどん遅れて後ろのほうに行っちゃうんです僕らが全部見終わって戻ってきたときはまだ半分ぐらいのところにはかないんです。今日はもういっぱいになっちゃってもう見られないとおっしゃった。僕はその時なんて誠実な人なんだろうと思った。それは、担当の人が案内してくれるならそれについていかなければならない、というのが常識だとももって僕はついていったんだけど、高山先生が常識が無いというのでは無くて、絵描きとして、見るもの感じるものとして誠実であるならそれが（遅れてしまうのが）本当なんです。見れば見るほど、見かたが深け

れば深いほど自分の中に入ってくるので、そのほうが本当の見かたなんだと思って反省しました。そのくらい中国というのは見るものが多くて魅せられる（だから絵が描けない）というもある。いつか中国を描くことがあるかもしれませんが…。それと一つだけいえば僕は緑の絵が多いのですが、中国の緑というのはどっかちょっと墨が混ざったような緑なんです。日本やフランスの緑とはちょっと違う、そこのところがちょっとひっかかっているのかもしれない。

Q：年を取って来ますと、感動する気持ちが衰えてくるように思います。ところが、「ちょっとちょっと」という呼び掛けが聞こえてこないと画にはならないとお聞きしました。日常生活の過ごし方をお伺いしたいと思います。

A：おっしゃるとおりですね。ドキドキする気持ちが無くなったらさぞつまらないだろうと思います。お隣にいらっしゃる方はご主人ですか？あ違うんですか。ご主人なら控えなければならぬと思いますが、やっぱり素敵な人がいればドキドキするじゃありませんか。僕が一番怖がっているのは、今は素敵な人を見ればドキドキしますが、だけど本当にそれがなくなっちゃうんだろうか？という恐怖感があります。しかし、おっしゃるように僕は女子美の付属の校長をしているときに、いろんな進学校の校長先生と週間読売なんかで座談会をやったんです。進学校の校長先生は自分の学校は人生の勝利者を目指します、と臆面も無くおっしゃるんです。僕は人生の勝利者なんていう言葉は若干抵抗があるんですが、僕も同じ言葉を使って人生の勝利者を目指すといいましょう。だけど人生の勝利者の中身が違う、いい大学に入って、良い会社とか良い役所とかに勤めるのが人生の勝利者というのならそれは違う。つまり一生の間にどれだけドキドキする時間を沢山持ったかというのが僕にとって人生の勝利者だと思うというように言って、女子美の付属の中学生や高校生はそういう資質を磨くということをしたいといい続けてきた。僕は本当にそう思います。お金が無ければ生きていけないからお金も大事ですけど、だけど本当に大事なものはドキドキした時間をどれだけ沢山持ったのかじゃないのかと思います。絵に限らずそういうものを日常の中で探していられるというのはとても大事なことなんじゃないでしょうか。

宜しいでしょうか？

それではこれで終わらせて戴きます。(拍手)

以上